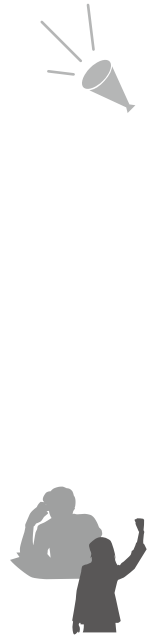


20代、あの頃私は……研究と青春

「衝撃的だったおっちゃんの話」

上村敏之



20代の頃、私の青春時代は将来不安と戦う日々だった。研究とは、不安を忘れる手段だったのかもしれない。博士課程の大学院生だった私は、企業の財務データをを用いて法人税を分析していた。その論文は査読雑誌に掲載され、私が大学教員になるきっかけを作ってくれた研究の1つである。

この手の研究には、財務諸表を正しく読めることが必要である。税理士試験の会計2科目に合格していた私は、会計の知識を研究に生かすことができた。「人生に無駄はない」と何度も思った。私は、当初から研究者を目指していたわけではない。関学経済学部への進学が決まった18歳のとき、自立した税理士になりたいと思ひ、アルバイトで稼いだお金で専門学校に通った。

税理士試験の勉強は辛かった。ある日、梅田の専門学校の自習室で30代のおっちゃんAとBの会話が聞こえてきた。A「次の試験で落ちたら、もう諦めます」B「なんで？」A「妻が働き、娘の面倒もみてもらって、私は勉強一筋。もう限界ですわ」。気楽で安易に考えていた学生の私には、人生を賭けるおっちゃんの会話が衝撃的だった。失礼がないように勉強し、大学3年生で簿記論、4年生で財務諸表論に合格した。

税理士試験は全部で5科目ある。当時の税理士法では、財政学の修士論文を国税庁に提出して承諾を得れば、税法3科目が免除だった。大学4年生のときは、大学院の受験勉強と税理士試験の勉強、就職活動もやった。就職活動は貴重な経験だった。内々定をいただいたが、結局は

大学院に進学する。

修士論文が書ける見通しがつき、大学教員という新たな目標が頭をよぎった。両親の離婚で金銭問題は大きかったが、一人暮らしでも勉強を続ける程度の奨学金は得た。「大学教員になれなくても、税理士で食える」と考えて博士課程に進学。26歳で日本学術振興会特別研究員となって生活の安定を得た。同年、東洋大学経済学部から内定をもらい、将来不安から解放された。内定の電話をもらったときの感動は一生忘れられない。

税理士になる目標を持ち、おっちゃんの話に衝撃を受けて勉強したことが、その後の研究の役に立ち、大学教員の内定につながった。いま考えれば一本の糸でつながっているが、計画性はない。まさに計画



注 関西学院大学大学院経済学研究科博士課程1年生だった24歳の私。神戸の北野にて。

された偶発性（ブランド・ハッペン・スタンス）。だからこそ、常に目標をもつことが大切なのだ。それが実現しなくても、偶発的に成果につながってゆくものだから。